

## 新刊紹介

蓮如上人とその思想

七里 仲麿著

平安朝の中頃から以後、今まで貴族が占有してゐた政權が次第に武人の上に降つて、社會の思潮が推移するにつれて、佛教も亦同じ氣運に向ひ、今までの貴族佛教は腐敗の極に達した。即ち南都北嶺の佛教は甲冑佛教に、眞言は金剛佛教に化した。のみならず當時の社會民は藤原氏にかはつて天下の政權を握つた平家は源氏の爲めに追ひ立てられて、はかなく西海の藻屑となり終つたことを見せつけられては、貴賤上下等しく榮枯盛衰の常なきことを感じ、心靈は皆飢渴に迫つてゐた。かやうな時代の要求に應じて現はれたのが、元祖法然上人と宗祖親鸞聖人である。こゝに淨土宗と淨土眞宗との凡夫の宗教の開立を見た。而して存覺上人、覺如上人の大谷の基礎が完かなる時代も過ぎて、善如上人が第四世の法燈を繼がれた頃から大谷は漸く衰退し、眞宗の法義は停滯の形となつた。巧如上人の時に至つては其極に達した。第七世の存如上人は深く衰頽を慨歎して、それが復興は忘れられなかつたが、未だ時來らずして没せられた。この時代の悲運を負つて出世せられたのが第八世蓮如上人である。上人の時代は内外共に多端の時である。今吾が宗教界を觀るとやはり同じ事實に立ち至つてゐる。凡そ過去に於ては思想的信仰的な不安と危機とが廻つて來た時には、此不安のど

ん底から常に新しい光明——偉大な宗教的天才が出て、新しい宗教を生み出したものである。現代を此方面から觀ると、元より宗教そのものに懷疑的な思想を持つてゐるものも少くないが、尙それ以上教團の存在と價值とに疑問を持つてゐるものも決して少くない、否それよりも教團内の人々自からが此問題に對して不安と焦燥とを感じてゐることは豫想外である。そこで吾々の待望してゐるのは聖者の出現ではなくて、教團の中に宗祖の信念を振興して教團の使命を發揮すべき天才的宗教家の出現である。天才的宗教家とは確かな信念を有することは勿論である。七里氏は過去の歴史中にその人を求めて蓮如上人を見出し、上人の生涯と思想との中に宗祖の信念と事業とを完成した大きな精神を洞察して該書を出版せられ、どこまでも蓮如上人の再現を望んでゐらる。先般稻葉昌丸氏によつて「蓮如上人行實」といふ書が著されて蓮如上人に關しては殆んど完全に近いまでの資料が提供せられた。今また該書が七里氏によつて出されていよゝ喜びを深くした。本書の特色として見るべきは、前に述べた様な宗教的天才家の出現を、望することに立脚地を置いて論ぜられてゐることは勿論であるが、その目次の示す如く、第一篇、傳、序、佛教の動きと蓮如上人、一、上人の生ひ立ち、二、苦學の上人、三、傳燈と法難、四、流浪の上人、五、吉崎御坊の建立、六、北陸の異安心破斥、七、吉崎の法難、八、近畿諸國の巡錫、九、山科本願寺の建立、十、上人の晩年、第二篇、思想、一、眞宗各派と蓮如上人、二、親鸞聖人の信仰、三、親鸞聖人より蓮如上人まで、四、蓮如上人の眞宗中興の事業、

(一)教圖としての本願寺中興、(二)他方信心の中興——信心爲本、(三)宗風の顯揚——王法爲本、イ、己れの守るべき道、ロに他對する道、1、人としての道、2、國民としての道、3、宗教信者としての道、第三篇、帖外御文、拔萃、帖外御文拔萃につづて、帖外御文、第四篇、類纂御一代聞書、蓮如上人御一代聞書類纂について、一、求道、聞法、二、佛力、三、信心・一念歸命、四、信德、五、無我、六、讃嘆、七、佛物・冥加、八、難信、九、宿善、十、自信教人信、十一、教誨、十二、自誠反省、十三、誦經・念佛、十四、同胞同位、十五、佛法世法十六、崇佛・先蹤尊敬、十七、御文、十八、夢想、十九、御經驗その他、といふ順序で上人の全面を知る好都合の書であるといふことである。(定價金壹圓五拾錢、甲子社書房出版)(S・K)

### Sante de sanctis ; Religious conversion

pp. 324 London 1927

本書は回心のバイヲ・サイコロジカルな研究であつて、多くの意味に於いて興味を有してゐる。著者が本書の出版にいたつた眞の動機も、宗教は一般に、悼はしき日常の貪婪生活の圈外に立ち得る凡ての者に興味を感じしむるものである」(p. 6)と信じ且又「概して研究所及び病院に於ける我が大學の研究生は宗教を無視しがちである」(p. 9)ことを見出したにある。其れ故に、サンクチス氏は宗教生活の或る現象を描いてこれを科學的に研究することは、宗教を魔術とし或は其れを僧侶の有する偽瞞の組織であるとして捨て去る事の不可能なことを人々に

確信さす事が出来ると信じて筆を執つてゐる。又氏の立場も面白い。多くの回心の研究は福音的、新教的方面より爲されてゐるが、こゝでは氏は羅馬法王の加護の下に執筆してゐるが、其の影響は受けてゐない。然し伊太利の宗教と英吉利の其れとの間における立場の一般的相違は明かに著れてゐる。一例を示せば八章の「回心の豫知性に於いて氏は、「神學者は此の豫知性の要求を認めないであらう。何となれば神學者の説く所によれば超驗的にして豫知し難き要因が回心には必ず存してゐる、其れが「恩寵」なのだ」と述べてゐる。伊太利では斯く神學に歸せらるべき態度をとる教理論者は甚だ少數であらう。著者も亦個人的には全く教理神學には束縛を受けてゐない。

過去數世紀の間回心の問題は之を信ずるものと否とに拘らず喧ましく論議せられた題目である。著者は本書に於いて此の回心を新しき見地より考究してゐる、即ち其の證據を探究し、其れを近代心理學に依つて説明してゐる。然も此の際に同情ある態度を有してゐると同時に科學的精神を失つてゐない。こゝでは氏は回心の諸原因及び其の形式の多様な事、其の過程及び後果、其れの病理學、其れの豫知性を考究してゐる。近代的材料としては四人の回心者の特別研究も見ることが出来る。大體に於いて研究の順序は從來の様式に従つてゐるが、これまでの研究者の回心に關する著述と趣を異にする點は、精神分析學的假説を採用してゐる事である。其のために内容に一新味を加えてゐる。興味を中心とする章は、七章の「宗教心理學に於ける(回心の)病理學説」であつて、充分なる分析を盡した後、氏は神

約と結論(回心の豫知性)(Y)

George Galloway, Faith and Reason in Religion,

VII 231 Pages, London 1927

祕家や同心者の眞の型は、彼等の生活に於ける過程の價値の問題を考慮に入れなくとも、心理變性のもと區別する事が出来る」と結論してゐる。即ち、斯かる區別を明白ならしむる決定的な心理學的要因が見出せる事を確信してゐる。が然し眞の型に屬するものであつても、或る場合に於いては神經病や病的性質を有して居る事を否定してはゐない。只此れらの徴候は符合してゐるに過ぎぬと見做して、神祕家や同心著の宗教的本質とは同一のものであり得ないと斷じてゐる。シュエーマンやブレークやニーチエの如きは明かに斯かる病的傾向を有してゐたが、彼等の著作を其の心的虚弱の直接的産物と見做すには何らの依頼すべき根據もないし、又宗教的天才の著作が其の人の性格の病的方面の直接的産物であると想像すべき何らの根據も無いのである。(p.240)

著者が本書の初に於いて、「恩寵」の護衛士ともならず、又無宗教者の指導者ともならずと言明せる如く、著者の論ずる所は至極穩健である。論議のすゝめかたも秩序だつてゐて、變つて珍らしい立場よりして同心の研究に充分なる刺激と暗示を與えてゐるのは感謝に堪えぬ。尙卷末には神祕主義と精神病學の兩面に亘る文献を廣く涉獵して五十六頁の間に同心の分析及び其の説明をしてゐるのも有難い。内容は全部で八章次の如し。

## 第一章、現代宗教心理學(其の限界と方法)

第二章、同心と其の原因、第三章、同心の型、第四章、同心の過程、第五章、昇華作用、第六章、同心後(同心者の行動)第七章、宗教心理學に於ける病理學說(病理學的同心)第八章、要

これは「宗教哲學」に名を擧げたガロウエー氏の近作であつて、宗教や神學に關する諸種の問題を考究せる論文集である。内容中に於いて最も重要なものは第一章の「知識と宗教的信仰」であつて、説く所は次の様である——信仰は人の魂の原本的精力である。信仰は宗教上に於いて重要なばかりでなく、一見之と薄縁を有するかの如く見ゆる知識に於いても、信仰の働きは其の根底に於いて緊密なる關係を有してゐる。我々は全然信仰を度外視して知識のあり得ざる事を知る。一事一物の末を知るにも信仰を缺きてはそれが全く不可能となる。知識の要素より信仰を刪除せんか、其は、寧ろ知識に非ずして空想となる。意識的觀念論が自家撞着に陥るのも之が爲である。されば信仰を驅逐し、或は之に信用を置く能はずと主張し得る程に完全なる知識はない。我々の知識の體系は其の對象とする實在を取扱ふには不適當であり且、信仰なる假定を吟味する最後の方法としては用をなさぬものである。さは云え信仰か判然と知識の領域を超えた世界を有すると斷ずるものではない。信仰と知識は一つの統一に入るものであり、人間性質の活動であり表現である。而して人間性質は本質的に、自己の分裂を許すことは出来ぬされば兩者は、共に靈の活動を司り、相關し、相互補助によつて個人生命の發達と満足を求むる所の二つの様態である。信

仰も知識も共に眞實なるものを取扱はんとする要求を有してゐる。而して信仰自身も一種の知識である。知識は然しながら、常に部分的なれども信仰は全人的活動であり、理性活動の背面には必ず厳存してゐる。事實、信仰はより、原本的な活動であつて、其の領域は理性の其れよりもより、廣きものがある。「知識の體系たる理性の終る所に信仰始まる」と云ふ命題は、眞ではありえないが「理性の終る所信仰終らず」とは眞であらう。其の所以は、理性の求めて而して得られざる綜合を、宗教的信仰は達成するからである。より、廣き世界觀を興ふると云ふ意味に於いては信仰は知識の完成である。第二の論文は「宗教的信念の發生及び眞理」に就いて草せるものであつて、宗教的信念の發生及び成長は、宗教經驗及び宗教經驗が依據してゐる所の實在を解釋せんとする努力である事を述べてゐる。次には「進化和基督教の究極性」に關する論文がある。こゝでは人間歴史に入り來れる神靈の至高なる表現と見做されたる基督教が絕對的であり而して究極的であることを述べ、其のために次には「歴史と其の宗教的解釋」と云ふ論文を持つて來てゐる。此の章に於いては歴史は聖なる意味を有すと尙主張し得るや否やと云ふ問題を取扱つてゐる。氏は若しも我々が社會及び歴史に於ける人格の根本的性質を認むるならば如上の事が可能であると信じてゐる。されば歴史は個人的發達の媒體と見做され得る。歴史に内在せる價值は凡べて個人の中心及び其の生々たる表現に見らるゝのである。

殘餘の論文は寧ろ神學的性質を帶びたものであつて其の一つ

は「恩寵と自由の神學的反立」を取扱ひ、他は「辯護論者としてのバットラー僧正」に就いての興味ある研究である。最後のものは「神學の研究と牧師の活動」を論じたもので氏は、確かに重要に點に觸れた言葉を述べてゐる。と云ふのは氏に次の言がある。説教者は「靈的價值を自ら發見してゐない所の教説を彼自身のものとして公言する資格はない」と。當時の靈的經驗を表現する力を全く失へる傳統的教理を辯護することこそ實に説教をしてこよなく無味ならしむるものである。骸骨の整理は如何に入念なるも血は通はずと極論はせざるも神學より信仰に出づるより信仰より神學に出づるをより宗教的と信ずる。氏の説く如く宗教は科學に於けるが如く、陳腐なる教説を棄却する事に常に注意を拂ふべきである。情操の場合も此の例に洩れないが、とにかく宗教的教理が眞ならざる事を、實驗的證據に訴えて證明してゆく事が甚だ容易でない點に困難がある。其の結果棄却の過程も随分長い間時を要するであらう。然しながら信念の基底に就いて歸納的研究をすゝむる宗教哲學がかゝる過程に對して貢獻することの比較的大なるを知る。

氏の著述は破壊的ではない、然しながらこゝに示せる原理は若しも宗教的信念が經驗を表し此れを正しく傳ふるものならば其の繼續過程を純化する爲に貢獻する所があらう。氏の立場も決して偏頗ではない。其の推論も公平であつて廣き視野に基礎して書かれたものである。氏の宗教哲學を窺ふには好適のものであらう。(Y)

武家時代社會の研究

牧野信之助著

「學窓を出で、以來、石川福井滋賀の諸縣を展轉して、主として地方史の研究に従つた私の仕事の大部分は、先づ零細な史料を丹念に蒐集することであつたが、この間に於ける最も忘れ難い印象は、屢々其等の地方に於て既に久しく取り殘されてゐた村方所傳の券契を始めて抽出した時の喜びであり或は亦組合、家、神社、寺院などの證券を披展して之を讀破した嬉しさであつた」とは本書の自序の初に記されてゐる言葉である。地方史研究の間に生れた著者の考覈を集めたもので、編を分つこと四、法制經濟史上の諸問題、土地制度及聚落問題、時勢及社會相、教界と各僧の目の下に三十三章の論文が配列されてゐる、大部分は一度學界に發表されたものであるが、これに未發表の一兩章を加へ、更に全體に亘つて添削が施されてゐるのは、著者の飽造學的良心の敏感さを語るに十分である。その上鮮明な圖版八個を挿入して錦上添花を添へ、最後に成稿年表が添へられてゐる。西田直二郎博士の序にいはれてゐるが如く、「かゝる諸研究が尙ほ早く學問界に出現することを望まねばならなかつた」のであつて、近時わが中世の新研究の發表されたものは少くないが、本書のやうな土に即した社會研究は曉天の星の如く稀である。日本の中世を窺はうとするものにとつて、本書はたしかに光の冴えた明星でなければならぬ。(菊列布裝六三〇頁價五、八〇。刀江書院發行)(正)。

日本佛教史の研究

第三卷

大屋 徳城著

先に第一卷を公にし學界に資する所尠くなかつたが今度編纂・印刷上の都合から第二卷を後廻しとして第三卷鎌倉時代を刊行された第一卷と同じく主として嘗て種々の専門雜誌其他に發表されたものであるが、觸目し得なかつたものも随分多い。而てその内容は三部門に分けて編輯されてゐるが第一部門は一般に關する研究。第二部門は鎌倉佛教の研究(上)第三部門は鎌倉佛教の研究(下)である。内容目次を示すと次の通りである。

第一部門。一、藥恒の年代に就いて。二、大和民族の實生活と戒律の思想三、平安末に於ける社會の解體と鎌倉初期民心の動搖を叙し新佛教興起の事情を論ず。四、室町時代の佛教。五、東山時代の佛教。

第二部門。一、創立時代の淨土教(一)、元久の法難。二、南北朝北嶺の運動。三、承久の法難。四、源空滅後の厄難。と論難五、選擇集の流布と其祖述。二、十六門記の眞偽を論ず。三、佛嚴と十念極樂易往集。四、鎌倉中期に於ける淨土教の信仰。五、善峯時代の善惠房證空。六、分立時代の淨土教。

第三部門。一、鎌倉時代の禪宗諸家と密教(一)、總説。二、榮西及び其門葉と密教。三、辨圓及び其門葉と密教。四、覺心及び其門葉と密教。五、禪宗と大乘菩薩戒。六、結論。二、西の印象と道元。三、禪宗綱目の出現と其思想上の背景。四、立正安國論と其思想上の淵源。五、元亨釋書の非難に就いて六、南北朝に於ける大覺佛光、兩派の諍、以上である。猶挿入圖版として卷頭に東寺金剛藏所藏尊勝眞言異本勘定持誦功能唐朝日域興隆流布緣起。同寺所藏十念極樂易往集。東福寺所藏谷

兩且金灌頂印信。高野山金剛三昧院所藏菩提達磨和尚住世留形内眞妙用祕訣。名古屋寶生院所藏大日經見聞。東福寺所藏台宗十類因革論。建仁寺大中院所藏天台四教儀を掲出してあるが何れも未だ嘗て圖版として公にされた事のない珍品である。而して本書に於て學界に貢獻した新説は種々あるが大體次の様な諸點である。先づ尊勝眞言異本勘定持誦功能唐朝日域興隆流布緣起の發見に依つて法華驗記の著者藥恒の年代を推定した事、十六門記が偽撰である事を明確ならしめた事、十念極樂易往生集の發見に依り鎌倉初期の淨土教に關する新説を出した事、鎌倉初期の禪宗は禪密兼學なる事を明らかにし特に聖一國師の印信を學界に提供した事、及び凝然と師傳の著述上の關係を明らかにし師傳が凝然の著書を底本として元亨釋書を著作したといふ説が行はれてゐるのを否定した事等である。(京都東方文獻刊行會發行定價四五〇)(達)

## 印度佛教美術考

逸見 梅榮著

邦文で書かれた印度佛教美術の文獻は松本博士の印度の佛教美術等の外にはあまり多くはない。逸見氏の本書は非常に凝つた大冊で本邦に於ける印度佛教美術に關する文獻の隨一とならう。目次を左に掲げる。

緒論(印度佛教美術の起稿にのぞみて。考古學的知識の必要印度美術の特質、佛教美術の地位、佛教美術研究方法) 本論(阿育王以前の建築、佛教建築物の種類) 窣覩波(窣覩波、塔形の變遷) 制多(制多、制多の種類) 僧院、塔門、欄楯、石柱(塔

門と欄楯、塔門、欄楯、單柱) 後記、索引、口繪チャガンナート神殿を初めとし挿圖は百三箇に及んでゐる。内容はアート紙で菊倍版の大冊、裝幀亦優美である。(東京・子社書房、定價二五、〇〇)(達)

## 百姓一揆の研究

黑 正巖著

本書は徳川時代二百六十餘年間に起つた百姓一揆五百七十四件に依つてその本質を明らかにし、以て徳川時代の封建社會が崩壞した過程を研究したものである。今迄徳川時代の研究は多く出てゐるが、何れも支配階級たる武士の統制を中心として研究されてゐるので、本書に取扱はれた様な被支配階級たる農民と武士との對主關係を研究したものはあまり出てゐない様である。本書はかゝる缺を補ふものといふべく近世經濟史、法制史に於ける良き文獻である。次に目次を掲げて内容の一般を紹介する事としよう。第一章緒論(百姓一揆の概念・百姓一揆と封建社會の崩壞との關係・百姓一揆の研究方法) 第二章百姓一揆發生の原因(百姓一揆發生の素因・百姓二揆發生の動因第三章百姓一揆の抵抗形態(百姓一揆の積極的抵抗形態・百姓一揆の消極的抵抗形態) 第四章百姓一揆の統制(百姓一揆の豫備行動・百姓一揆の構成・百姓一揆の手段・百姓一揆の統一と節制) 第五章百姓一揆の發生狀態(百姓一揆の繼起性・百姓一揆の反覆性) 第六章百姓一揆の傳播性と持久性(百姓一揆の傳播性・百姓一揆の持久性) 第七章百姓一揆に對する武士の態度(法令に現はれたる武士の態度・百姓一揆鎮壓に現はれたる武士の態度) 第八章

百姓一揆に對する當時の學者の見解（本居宣長の見解・正司考の見解・世事見聞錄に於ける見解・山法蟠桃の見解・昇平夜話に現はれたる見解・其の他の學者の見解）猶附録として百姓一揆年代表・百姓一揆地方別表の二表が加へられてゐる。（東京岩波書店發行）（四、〇〇）（達）

## 日本宗教史の研究

長沼 賢海著

長沼氏が明治四十三年から昭和三年迄約二十年間に涉つて雜誌及は單行本に發表された研究論文を纏めたもので菊版千頁餘の大冊である。佛敎史の研究に關する論文が大部分を占めてゐるのは勿論であるが次下に示す様に切支丹や民間信仰等に關する研究もある。就中最初の親鸞聖人之研究は明治四十三年の發表に係り當時頗る喧しかつた雄篇である。こゝにこれを見るのに愉快であるがたゞ其後の研究に依つて一二訂正を要すべき點も訂正されてゐないのはいかなものであらうか。其他の諸篇に於ても訂正すべき點がある様であるがすべてとのまゝになつてゐるのはいかなものであらうか。しかし近來佛敎史又は宗教史に關する文獻が段々纏められて來たのは學界の爲慶賀すべきである。左にその目次を掲げる。第一篇親鸞聖人の研究、（親鸞以前の僧侶の肉食妻帯、親鸞の肉食妻帯觀、親鸞の室と教會の相續法附親鸞の子女、眞宗教會規式、眞宗の宗名と親鸞、法然と親鸞との關係、結論）第二篇蓮如上人と一揆運動（蓮如上人と時世、上人の布敎地理、寺内町の發達、門徒の結社、上人と一揆運動との關係）第三篇ゑびす神研究（夷社の沿革、夷

神と三郎殿と蛭子、夷神の根源、夷神の性質及其變化附荒夷及沖夷）第四篇念佛僧の妻、第五篇天滿天神の信仰の變遷、第六篇倭一とパン船及寶船、第七篇西宮ゑびす神、第八篇安藝門徒と嚴島及び石山の戰爭、第九篇大黒天の形容及び信仰の變遷第十篇大黒天の形容及び信仰の變遷續篇（傳神慢の記の考證、平安時代の圖像及記錄に見ゆる其の形容、平安時代の其修法と信仰、他の諸尊諸天との關係及其眷屬と神使、鎌倉時代の信仰と形容、室町時代に於ける大黒天の信仰と普及）第十一篇天草のはなれ切支丹の研究（文化度の信者弘明、高濱村の離れ切支丹の信仰狀態、其の他の天草はなれ切支丹）第十二篇室町神社の阿彌陀經石、第十三篇時頼の廻國說と其信仰、第十四篇平戸島の離れ切支丹、第十五篇切支丹と佛教、以上である。（東京敎育研究會發行、定價一〇、〇〇特價八、〇〇）（達）

## 滋賀縣史

滋賀縣編

本縣史の編纂主任は牧野信之助氏で嘗て福井縣史を編纂して縣史中の雄篇といはれたが、本縣史はそれ以上の出来といへう。全篇六卷あり第一卷は概説、第二卷は上代から中世迄、第三卷は中世の續編及び近世迄、第四卷は最近世、第五卷は參照史料、第六卷は附圖である。就中第一卷概説は特に文字を大きくし記述を簡明にし且つ所々に多く興味ある圖版を挿入してある。これは全編を精讀する時間を有しない一般讀者にも短時間でよく縣史の大綱を捉へ得る様にしたもので論者の用意を知る事が出来るが、内容亦よく要領を捉へ得て概説の名に背かぬも

がある。又活字が特に大きいし教科書風に編纂して次に掲げる通り文章の後に必ず略年表が附してあるから滋賀縣下の各中學校の上級生に郷土史の教科書として歴史科副教科書に用ひさせたらその効果は蓋し大なるものがあらう。これは縣當局者には非とも一考を煩はし度い所である。かかる意味に於いても、本縣史從來の縣史より一步進んだものである。次に第一卷の目次を掲げて内容の一般を紹介する。第一章上代の近江と歴代の變都、(國史上に於ける近江の位置、石器時代の遺蹟、古墳の分布、古典に見えた近江關、係の神々とその子孫、倭姫命と日本武尊、高穴穗宮變都、麻坂、忍熊王、蚊屋野の變、三韓隋唐との交通と文物の發達、天智天皇と近江變都、近江宮の位置と廢都、壬申ノ亂、略年表)、第二章奈良朝と紫香樂宮(壬申亂後の近江、國野卿の制度、班田の實施、歴代の行幸、國司の治蹟、産業の發達、紫香樂宮と甲賀寺、保良ノ宮、押勝ノ亂、國分寺と石山寺、金蕭守と竹生島略年表)第三章最澄の叡山開立と山門、寺門(平安遷都と近江、最澄と山門開立、圓仁と圓珍、良源、山門、寺門の分立、平安朝初期の名刹、天台改宗式内社及びその他、本地垂迹説と神社、社寺領と庄園、國內の治政一般水陸の交通、勝地と風流、略年表)第四章山門の亡狀と源平合戦(平安末期と紀綱弛廢、永保の寺門燒撃、惡僧橫行、保安の寺門燒撃、平安時代の衆徒亂暴、山寺二門の信仰、淨土念佛と源信、源氏と寺門、保元平治亂と源氏の敗走、以仁王の舉兵と寺門、義仲の入京と粟津の陣沒、略年表)第五章佐々木氏の守護と山門(佐々木氏の據頭、武家と山門の衝突、山門の騷亂、

承久亂と佐々木一族の去就、承久以後の山寺二門、山門と宗教改革、國中社寺の盛衰、蒙古の難と諸社寺祈禱、庭園と守護地頭諸衛道の整理、初期の近江商人、後醍醐天皇の御討幕、六波羅兵の殉難、佐々木氏略系圖、略年表)第六章南北朝の戰亂(建武中興の失敗、尊氏の謀叛と坂本行幸、山門行幸と義貞の北國落、南北朝分立、信樂の官軍、尊氏一族の内訌、北朝數度の蒙塵、道譽と氏賴、山門衆徒の亡狀、足利方の庸兵寺門衆徒、石山安國寺其他、永源寺の創立等、略年表)第七章室町時代の庶民の騷亂(室町幕府の成立、義滿時代の近江、永享の山門征伐、庶民運動、湯起請と逃散、馬借一揆、交通と湖上運漕、近江商人と繩張り争ひ、略年表)第八章戰亂と國內争亂(應仁亂前の室町幕府、應仁亂中の近江、應仁亂の影響、公卿僧徒の逃避、義尚將軍の高賴征伐、義持將軍の高賴再征、歴代將軍の近江亡命、戰國時代の六角、京極家、淺井氏、勒與、戰亂中の社寺、新佛教の宣傳、庄園崩壞、鄉村の自衛、御料地の荒廢、商業の發達、關所の濫設と海賊、琵琶湖の風景觀、佐々木氏略系圖、略年表)第九章織田信長の撥亂と安土城(分裂から統一へ、信長の出生、信長の西上、淺井・淺倉の反、姉川の役、山門の燒打ち、將軍義昭の追放、淺井・朝倉の滅亡、信長の平和事業、一揆の活動、十ヶ寺連連盟、本願寺一揆の猖獗、安土築城、安吉土城下町、角技と放鷹、安土宗論、安土神學校、信長弑害、光秀の伏誅、略年表)第十章桃山時代と民政の發達(信長の後繼者・豐臣秀吉の出世、清州會議、賤ヶ岳の役、統一事業の進捗、平和事業、社寺再興、寺門關所、本願寺々院の保護



長濱の社寺、刀狩りと兵農分離、大閤檢地、石田三成の民政、村落結合、道路施設、都市の發達、秀吉薨後の黨争、石田三成の異圖、大津城の攻撃、關ヶ原の役、略年表）第十一章藩政々治と平和の連續（彦根、膳所の築城、諸藩分封、諸藩の民政、切支丹禁制と寺社復興、交通の發達、物産の興立、琵琶湖開鑿と瀬田川の浚渫、城下宿驛と商工郡市、近江商人の活躍、學問の隆興、藩學の設立、一般文藝の發達、寺社の保護と復興、農民一揆と天保騷動、米糧渡來と井伊大老、諸藩と時局、略年表）第十二章明治、大正時代と文物の發達（滋賀縣設置、舊習一洗の政、新法施行、文化の發達、天皇御巡幸、自治の發達と人口増殖、産業と交通との發達、教育と社寺、勤功赫赫たる九聯隊の災害と凶變、行幸と褒賞、悠紀田卜定、以上である。（滋賀縣發行、非賣品）（達）

## 大谷學會彙報

□十一月三日（木）明治節、午後一時より大谷學會主催の秋季公開講演會を催す。

一、報身觀の宗教心理的基礎

鈴木 大拙教授

一、起信論の眞如に就て 赤沼 智善教授  
右講演は本號に於て鈴木教授の分を次號に於て赤沼教授の分を掲載すべきにつき講演要旨を附記せず。

## 研究室彙報

### 佛教研究室

#### 佛教研究會

□十月三日（水）午後三時より研究室例會を開く  
講師演題左の如し。

一、起信論に於ける佛三身の原語を論ず

日暮 京雄氏

來聽者稻葉學部長、山邊主任、鈴木太、寺本、泉大河内等の諸教授を始め學生多數。

### 哲學研究室

#### 哲學研究會

□十月五日（土）午後七時より圖書館樓上に於いて哲學會例會を開く。

講師——青木教授

演題——莊子の辨證論に就いて

### 人文學研究室

#### 史文會